

低出生体重児の父親が児に面会した時の言葉の分析

2階西病棟 周産母子センター

○坂口 千賀 公文 京子 小笠原美和 徳本 光姫
森本 雅子 谷脇 文子

キーワード：低出生体重児、父親、言葉、育児

I. 目的

低出生体重児の父親が育児を行うことは、家族の発達課題を達成できるよう支援するためにも特に重要性が高い。当周産母子センターでも児との関わりを積極的に求める父親が多くなってきている。今回入院期間の長い低出生体重児の父親の面会時の言葉に着目し、看護者として今後の父親への支援の手がかりを得る事を目的に児の臨床時期毎に分析した。

II. 研究方法

1. 検索期間：H12年6月1日～H13年6月30日

対 象：H10年1月1日からH12年9月30日までに当院で在胎24週5日～38週1日で出生した低出生体重児の父親29名で年齢は20～49歳。児の生下時体重は613～2009g。児の平均入院期間は出生～急性期：11.3日、安定期：31.6日、退院まで：21.9日であった。

2. 分析方法：児の看護記録から父親の面会時の言葉を抜き出した。父親の言葉を児の出生時・急性期・安定期・コットベッド移床から退院までの4つの時期に分けカテゴリー分類を行った。

3. 臨床時期の定義

出生時：出生当日。

急性期：呼吸管理中または酸素投与や補液等により集中治療を必要とする時期。

安定期：急性期を脱し状態の安定した時期。

退院まで：コットベッド移床から退院まで。

4. 倫理的配慮：個人を特定する事なく、匿名としプライバシーの保護に努めた。

III. 結果及び考察

一般的に父親は児との初対面時、児の顔貌や外観に関心を示すといわれている。しかし今回の結果では、「乗り切るのは何日位ですか」といった生命に関わる質問が一番多く、他に成長発達への不安の言葉、「妻には元気と伝えてもよいか」という母親への気遣いの言葉があった。これらはいずれも父親の強いストレスを示すものであり、このような父親の状況を理解・予測した上で対応をすることが重要である。低出生体重児を持つという心理過程から少しでも早く離脱し、親になる心の準備を進める事の必要性が示されていた。

急性期では児の状態についての質問が最も多いが、「肺はどうですか」等、質問内容が肺や心臓といった具体的な病態への言葉に移行した。児の身体の動きやしぐさに関する言葉も出現し、励まし・気遣い・児をなだめる言葉が聞かれた。この時期私達は、父親が児を受容し、言葉というコミュニケーションで父親の役割を果たそうとしている状況を理解した上で、児との早期接触など援助していく事が重要である。

安定期では児の成長を喜ぶ言葉が出ていた。コットベッド移床から退院までの時期は、言葉の数は減少しているが育児や退院についての言葉が多くなっている。実際に育児を経験して、「ギャップが出ない時はどうしたらよいのか」といった具体的な質問が増え、また「今日はお父さんがミルクをするぞ」といった積極的な言葉も聞かれた。父親は児の成長や発達に目を向けており、コットベッドに移床後は退院後の生活を考えていると捉えられる。このことから、この時期は父親として成長する姿が窺え、親子関係の形成・発展の重要な過程をアセスメントできると考える。

面会における父親の言葉（表1）は大変意義がある。家族の発達課題への援助を行う私達は、父親の発した言葉をアセスメントし、父親自身も主体的な育児が行えるような看護展開が大切となる。出生時及び急性期から児の発達や個性をふまえた言葉があることから、父親は早期に前向きな姿勢を示しており、児の状況に応じた役割を果たそうとしている事も考えられる。

今後私達は父親の育児参加に対しては、健全な親子関係が営めるように言葉の意味をアセスメントし、母親に対すると同様に父親に対しても細やかな支援を行っていく必要がある。

表1. 児の臨床時期毎の父親の言葉（延べ数）

| 父親の言葉 | 出生時 | 急性期 | 安定期 | 退院まで |
|-----------------|-----|-----|-----|------|
| 状態についての質問 (54) | 8 | 12 | 29 | 5 |
| 成長発達への不安 (1) | 1 | 0 | 0 | 0 |
| タッチングへの恐怖感 (11) | 3 | 5 | 3 | 0 |
| 児への気遣い (3) | 0 | 3 | 0 | 0 |
| 児への励まし (8) | 1 | 5 | 2 | 0 |
| 〇〇と似ている (6) | 2 | 2 | 2 | 0 |
| 同情 (1) | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 成長を喜ぶ (5) | 0 | 0 | 3 | 2 |
| なだめる (4) | 0 | 3 | 1 | 0 |
| 児へあいさつ (1) | 0 | 1 | 0 | 0 |
| しぐさ (8) | 1 | 3 | 2 | 2 |
| 寝ている、起きている (8) | 0 | 0 | 5 | 3 |
| 表情 (1) | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 身体の動き (9) | 0 | 3 | 5 | 1 |
| 容姿 (3) | 0 | 1 | 2 | 0 |
| 育児について (27) | 0 | 0 | 9 | 18 |
| 退院 (6) | 0 | 0 | 0 | 6 |
| スタッフへの依頼 (6) | 6 | 0 | 0 | 0 |
| 出生の原因追求 (2) | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 母親への気遣い (2) | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 命名について (2) | 0 | 2 | 0 | 0 |
| 言葉の数 (延数) | 25 | 42 | 65 | 37 |

IV. 結論

父親は児と面会を重ねていくうちに親としての意識が発展し、それに伴い発する言葉の内容も成長していく。その父親の言葉をアセスメントし支援していく事が、家族の発達課題を達成させる上でも重要であることが示唆された。

参考文献

- 1) 柏木恵子編：父親の発達心理学，父性の現在とその周辺，川島書店，1993.
- 2) Lamb ME 著、竹内徹訳：父親の役割，乳幼児発達とのかかわり，家政教育社，1989.
- 3) マーチン・グリーンバーグ著、竹内徹訳：父親の誕生（第1版），メディカ出版，1994.
- 4) 田辺圭子他：極少未熟児を持つ父親へのアンケート調査，助産婦雑誌，47（1），1993.

〔平成13年11月2～3日，高知市にて開催の第32回日本看護学会（母性看護）で発表（口説）〕